及び洞庭湖上に客舟貪利の貿胡あり、財寶巨萬の商旅の往來通商せし事、是等の南海廣東貿易の珍貨は長安の都にも至りし事、並に廣東と長安と即ち支那の東南隅と西北隅と相距ること甚だ遙遠なる處にも水路舟運の連絡ありて、天涯地角、南北隔絶せるにもかゝはらず、

長安—渭水—黃河—(及び洛水)—汴水—泗水—淮水の運河—楊子江—洞庭湖—湘水—灕水—桂江—西江—珠江(又は粵江)—廣東

の如き洋々たる水路相通じて絶えざる事を知るべきなり。〔完〕

攝論古逸章疏とスタイン氏蒐集敦煌新出三攝論古章疏とに就いて（下）

矢吹慶輝

四　新集攝論章疏錄

以上は『義天錄』、『東域傳燈目錄』、『諸宗經疏錄』、『諸宗章疏錄』、『注進法相宗章疏錄』、『華嚴宗章疏錄』に據つたものであるが、更に僧傳中に之を搜索するに單に二三に止らない。以下且らく『續高僧傳』によりて新に上述以外の攝論疏を列擧する。

廿九　眞諦門裔智敦等の講說に就ては一に讓る

卅　波羅頗迦羅密多羅（戒賢に値つたと傳へらる）の綴文に當つた唐京師淸禪寺沙門慧頤は貞觀十年五十七歲で歿したが　傳文に「講華嚴大品涅槃大智度攝大乘及中百諸論、皆筌釋章部決滯有閒」といはれて

る（致二の九七）。是は梁論に據つたものであることは年代上確かである。

卅一　『續高僧傳』第十、慧曠傳には眞諦に會つて攝論を受けたといふに過ぎないが、大業五年六十歳で歿した淨願傳（致三の一〇）には、願は「正時攝論晩夜雜心」を講じ、前後の文より推すに攝論の章疏があつた樣である。

卅二　隋西京禪定道場智凝は彭城嵩公（二を見よ）に從つて攝論の講義を聽き初講第一勝相訖るや攝論の綱旨都て見つ可しとなし嵩の許を辭して疏を製せんとした。人々誇誕となしたが「及著疏既了、剖決詞宗、依而講解聲望轉盛」で隋文の代に名達の一人となつた。大業中四十八歳で歿したし嵩公に從つた關係から勿論古攝論疏を書いたことが明かである。（致二の一一）。明及法師なるものあり黎耶識の滅不に關して疑あり、凝の一言「滅矣」と聞いて大に慶び久しからずして卒したと記されゐるし、又學士靈覺道卓等の蜀土の名僧も凝から攝論を受け「逸還益部弘贊厥宗、故岷洛攝論由之而長矣」といはれてゐる所を見ると、攝論宗に取つて忘るべからざる人であつた。唐京師辯才寺智則は凝に從つて攝論を聽いたことが四十餘遍と記されてゐる（致四の十九右）。唐蒲州普救寺道積も智凝に就て攝大策論を學んだ。傳に「於十義熏習六分轉依無塵惟識（唯識と云ふに同じ）一期明悟」（致四の五二右）といつてゐる。

卅三　『續高僧傳』十一にある、武德六年に七十三歳で卒した法侃は曹毘（一參照）と關係あり「侃、學專攝論、躡足親依、披析幽旨渙然標指、解義釋名見稱清澈」と記せられ、其門下に道撫あり「宗師異解用通攝論」といはれ、成疏に就て記事はないが、何か攝論章疏類があつたものと思はる。

卅四　切廻撰『無性攝論疏』

廻は唐汴州慧福寺の僧で數多の經疏を撰せしが中に『無性攝論疏』あり、『續高僧傳』十三參照。

卅五　法護撰『攝論旨歸』

法護は彭城靖嵩に從つて攝論を承け大業三年三十二歲にて京の慧日道場に於て攝論を講じた。唐太宗が名德五人を召した中に法護も交つてゐて「自此校角攝論去取兩端、或者多以新本确削未足依任、而護獨得於心、及唐論新出奄然符會、以爲默識元有人焉」と記されてゐる。玆に新本は眞諦譯のことであつて唐論は玄奘譯である。併し護は貞觀十七年に六十八で卒したから、玄奘譯攝論の譯了を見ずして死んだことになる。梁論で不明であつた點が唐論で明了になり、それは護の考と同じであつたといふことは如何なる點であつたか、傳文簡にして詳にし難きを遺憾とする。『續高僧傳』十三參照。

卅六　智正撰『攝論抄』

唐至相寺智正は貞觀十三年に八十一歲で卒した學者で北地攝論の祖たる曇遷（下を看よ）と同學の人であつて「所著諸疏幷現筆受」とあり、弟子の智現が紙筆を執りて端坐思惟せる智正の傍に立侍して累載坐せず、それが爲に足疼心悶、覺えず倒仆する程の辛苦を嘗めて集錄せしもので「正凡講華嚴攝論楞伽勝鬘唯識等不紀其遍、製華嚴疏十卷、餘幷爲抄記具行於世」と道宣は記してゐるが、遷と同學なること及び餘幷爲抄記の文に攝論もあつたものと想定して此の一項を加へる。傳は『續高僧傳』第十五にある。

卅七　僧辯撰『攝論疏』

智凝に從つて攝論を承け貞觀十六年七十五歲にて寂し、其著「講聽之務惟其恒習、其攝論中邊唯識思塵佛性無（性）論幷具出章疏在世流布」といふから攝論疏があつたことは事實である。其傳は『續高僧傳』第十五を見よ。

卅八　慧休撰『攝論疏』

貞觀十九年に九十八歲で寂した人で空宗の學匠であつたが、同時に惟識（唯識のこと）をも學び乂曇

遷禪師や尼論師等に遇つて攝論を受け之を講じて疏章を造つた。又其門人靈範なるもの敕によりて弘福寺に召され攝論を宣揚した(『續高僧傳』第十五)。曇遷と尼論師に就ては前に屢〻記したから略する。

卅九　靈潤撰『攝大乘論義疏』十三卷

靈潤は道奘幷に辯相より攝論を聽き諸經論の疏ありしが、就中「涅槃七十餘遍攝大乘論三十餘遍幷各造義疏一十三卷玄章三卷」とあり其猶子、知衍亦攝論涅槃を講じた。詳傳は『續高僧傳』第十五を見よ。特に攝論の阿梨耶識に關する靈潤の所見を擧げてゐる點は敎義研究上の好參考である(致三の四四左)。今煩しいから略する。

四十　靈潤撰『攝大乘論玄章』三卷

前項參照。

四十一　曇遷撰『攝論疏』十卷

道宣が僧傳に「攝論北土創開自此爲始也」といつてる曇遷は前に屢々引用したが、北地攝論の祖であつて曾て唯識論を尋ねて熱病を感じ月の懷に入るを夢み乃ち擘て之を食ふに脆きこと氷片の如く病頓に治してから私に名を月德と改めた人である。偶々桂州刺史蔣君の宅にて攝大乘論を獲て大に之を喜び前に唯識を講じたが思構幽微、疏滯する所ありしが今攝論を獲て文旨判然となし、先づ北地故鄕に之を傳へんとして建業を辭せんとて船に乘つたが、風波の爲に進むことが出來なかつたので、遷が江神に告げて曰く「今欲以大法開彼(北地)未悟、若北土無運命也如何」と。そこで風が止むで岸に達するを得た。時人之を以て江神が南地譯攝論が北地に移るを欲しなかつたからだと解したと傳ふ。隋開皇七年徐州より敕に由りて京に出て攝論を講じた。「于斯時也宇內大通京室學僧多傳荒遠、衆以攝論初闢、投誠請祈、即爲敷弘受業千數」といはれてゐるから、攝論講說の盛況が窺はれる。慧遠が遷に就て攝論を承けたのも此時である。眞諦が攝論弘通に就て豫言したのも遷師の

ことであるとした。遷は大業三年十二月六日六十六歳で卒し「所撰攝論疏十卷年別再敷每學法輪諸講停務皆傾渴奔注有若不足也」と傳ふ。遷は又別に楞伽起信唯識如實等の疏九識四月(月或作明)等の章、華嚴明難品玄解等總て二十餘卷の著ありしといふ。詳傳は『續高僧傳』第十八を見よ。道哲・靜琳(續高僧第廿)・玄琬(同上廿二)・道英(同上廿五)・靜凝(同上廿六)・淨辯(同上廿六)の如きも遷に從つて攝論を受けた。

玄奘傳(致二の一〇二右)や神照傳(致三の三〇左)に出てゐる鄴の慧休は攝論家で盛んに講說したらしい。僧曇(致三の十二)の附見にある慧重は「攝論十地戶牖田開」とあり、又晚年に曇遷(隋開皇に歿す『縮刷藏經』眞諦譯釋論の序文の外に見ゆる「豫章郡守王欽開皇元年五月奏此論與遷持論不殊、」「遷禪師江南將至徐州講唱」などといふ文に見ゆる人である、致三の二一淨業の附傳參照)に就て攝論を學んだ淨業(大業十二年五十三歳歿)がある(『續高僧傳十二)。武德九年五十六歳で卒した終南山玉泉寺の靜藏は「乃遍諸法席聽採經論、攝論十地是所偏求」といはる(『續高僧傳』十三)。貞觀十年に六十九で寂した道岳は一生を俱舍研究に委したが、曾て所懷を告げし中に「毗曇成實學知非好攝大乘論誠乃精微」といつてるが、岳は九江道尼(一參照)より攝論を傳へたものである。(『續高僧傳』十三)。靈潤傳の附傳にある道弁法師は「檀名海岱講攝大乘」(致三の四三左)といはる。隋趙郡漳洪山智舜は仁壽四年七十二歳で歿したが、其弟子智贊は「攝論涅槃是所綜博」(致三の六三左)と傳ふ、貞觀十五年七十一歳で歿した志超も時々攝論を講じたと傳ふ(致三の八一)。唐箕州箕山寺沙門慧思(貞觀十六年五十五歳歿)が道嚴に就て攝論の講說を聞いた(致三の八二右)。窺基と塵識の問答をした慧熙は三論を宗とした人であるが、曾て攝論を研究した(致三の八三右)。大業六年召されて大禪定道場に入つた。普明は進具以後專

ら涅槃と攝論とを師とした(致三の二〇右)。唐普光寺慧進は貞觀八年五十餘歲で死んだが、傳文には「聽槃攝論大悟時倫」、又は「常弘攝論化開律部」などというてゐる(致三の一〇〇右)。唐大總持寺智實は貞觀十二年三十八歲で卒した人で、攝論を研究し、同寺僧普應も亦涅槃と攝論とに通じた(致四の二)。新羅慈藏も亦一夏攝論を講じたと傳ふ(致四の六)。永徽六年に六十一で卒した弘智は華嚴と攝論を講じた(致四の八)。隋の明誕傳には「通十地地持赴機講解攝大乘論彌見弘演」と記してゐる(致四の三〇右)。隋の慧重傳には「淨持戒地明解攝論」というてゐる(致四の三〇左)。隋の寶積は敕によりて京に入り智論及び攝大乘論を講揚した(致四の三〇左)。隋の道璨は攝論を鑽求した(致四の三一右)。隋の法周は「涅槃攝論是所留神」といはる(致四の三二右)。隋僧に此類頗る多し。慧誕傳に曰く「學究涅槃及通攝論」と(致四の三二右)。智光傳に曰く「少聽攝論大成其器」(致四の三二左)。曇遂傳に曰く 初學大論後味唯識研精攝論選其幽理」と(致四の三三右)。明馭傳に曰く「初學涅槃後習攝論」と(致四の三五右)。慧恭傳の附見に曰く「遠(慧恭と同學の慧遠)於京師聽得阿毘曇論(中略)攝大乘皆幷精熟還益州講授卓爾絕群」と(致二の四四左)。以下唐僧善慧傳に曰く「誦法華經聽收攝論」と(致四の四六)。寶相傳に曰く「專聽攝論」と(致四の四七左)。

以上二十八より四十迄は成疏ありしと想定し得るもののみを擧げたもので慧休以下の二十餘家は講說の傳を類集したものである。又廿八より四十までの二十二部中、卅三功廻疏のみは唐譯に依つたものであるが、他の殆んど全部は舊譯に據つて疏を撰したものであつたから、舊譯の章疏は以上四十部中で前節の七部と今節の二十二部とを合して實に二十九部となる。斯くして普寂が「傳譯以來製疏者蓋向數十家」といつたのは學究の知言であつた。

相衆名章」といへるは隋笈多譯にては「應知依止勝相勝語衆名章」といひ、唐玄奘譯にては「所知依分」となつてゐるから、此疏は先づ眞諦譯に據つたものであることを示してゐる。全體から見ると眞諦譯世親釋論に依りて、無著の攝論本文を解したものである。斷片の中途であるが便宜上、上記の題號下の疏文を引用すれば下の如くである。

攝大乘論三識義第二　出第一依止勝相衆名章言三識者乃是含靈壹道稟氣同依冥通物表義苞兩際性融眞妄功齊染淨斷縛梁津寂果妙路故使諸佛於三藏中廣辨斯義

三藏義中十一門分別　一釋名義　二辨躰相　三眞妄分別　四解或分別　五心意識分別　六善惡無記分別　七三性分別　八攝四識第九攝八九二識十攝十一識十一大小乘分別　初言釋名義者了別二諦名之爲識了別不同略有三種一名梨耶識二名陁那識三名生起識言梨耶識者此方正幡名無沒

五　燉煌新出攝論古章疏

以上に列擧せる如く古來數多の攝論章疏があつたもので諸目錄に列記せるものを整頓し直して總べて廿八部、更に、それ以外にて僧傳などから自分が今新に摘記したものが十餘部、合計四十餘部となる。斯く多數の章疏があつたが現存のものは一つもない。唯だ僅に引用文などに其片鱗を留むるものが一二あるといふに過ぎない。敦煌新出攝論古章疏三部は斯くして珍重すべき古資料といつてよい。

一

攝大乘疏（『解說目錄』第三注疏部の三九。『宗教研究』第八號一五六）

長篇の斷片にて中に

攝大乘論三識義第二出第一依止勝相衆名章

とあるに由りて攝論疏たるを知る。又「第一依止勝

識此有二義一識生滅門能受淨熏終能轉依成應身功德名爲無沒二就識眞如門終可顯了成就法身名爲無沒故衆名章云世間不破出世間不盡十地道前名爲世間初地已上名爲出世依攝大乘論衆名章中名別有八一名種子識此依達摩藏說以能持染淨二法種子故二名執持識此依解節經說以能執持諸根及種子故三名根本識此依僧祇部說以能生六七故又能生染淨二種果故名根本識四名窮生死陰此依彌沙塞部至无餘涅槃前常在不滅名窮生死五名梨耶義同前解六名質多有多種義及滋長義故七名果報識此依正量部以從善惡二種々子生故八名有分識與彼三有作枝因故依楞伽經名別有三一名藏識能含恒沙諸功德故二名聖識聖人所證是彼聖人之所用故三名第一義識以深細故依馬鳴論名別有三一名眞識以識躰性不生滅故二名眞如識以識躰寂故三名家識亦名宅識以染淨同依故此等諸識就識生滅門緣慮方了就識眞如門躰是神知名之爲了第二陁那此名執識以能執識本識爲神我故執彼名色以爲我所名爲執識依彼攝論名別有二第一執識義知前解二名七識乘六得名依馬鳴論名別有七一名妄識々躰浮虛故二名無名識不了無我境故三名業識以能染十使起惡業故四名轉識能緣我塵故五名現識照我塵顯現自心故六名智識以能分別我塵故七名相續識以我執恒起故云云

三識とは阿梨耶と阿陀那と生起識とであつて、衆名章は正しく此三識を說明せるものである。攝論本釋兩部の三識論を讀んで此十一門分別を見ると頗る要領を得た扱ひ方であることが知れる。識は「義苞兩際性融眞妄功齊染淨斷縛梁津寂果妙路」であるから要するに眞俗二諦を了別するに外ならぬ。然るに了別自ら不同あるによつて三種識ありとし、先づ初めに阿梨耶識を解釋せんとして識生滅門と識眞如門との兩面より其無沒識たる所以を說いてゐる。此二門は直に起信の二門を聯想せしむるものである。此の

二門の證文を攝論中より採つてゐるが「世間不破出世間不盡」といふ引文は眞諦譯釋論中に引かるゝ阿黎耶識界の五義中、第四眞實義の下にある文句である（往八の六左）。笈多玄奘兩譯は文句が違つてゐる。

次　此阿梨耶卽ち無沒識は攝大乘論衆名章にある名別八種として種子識、執持識、根本識、窮生死陰、梨耶識、質多識、果報識、有分識の名を擧げて各其出據を略擧せるが、此八名の叙述を以て之を眞諦（往八の六—九）玄奘（往九の四—六）に對照すると、勿論眞諦譯釋論に據りて八名を列擧したものだといふことが知られる。八名の解釋は釋論によりて要略を記したものである。次に楞伽經によれば「名別有三」として藏、聖、第一義の三名を列し馬鳴論によりて眞、眞如、家の三名を列し「此等諸識は識生滅に就て緣慮して方に了す」るもので「識眞如門に就ては躰是れ神之を名けて了となす」といつて阿梨耶眞妄和合の義を述べてゐることが頗る徹底してゐる。

全體舊音譯阿梨耶識（無沒）新音譯の阿賴耶（藏）に關して法相部の書物には阿賴耶十八名としてある。了義燈の頗に略名で無沒(1)本(2)宅(3)藏(4)、種(5)無垢(6)持(7)緣(8)、顯(9)現(10)轉(11)心(12)依(13)、異(14)識(15)根(16)生(17)有(18)といふものの是れで、一切諸種の隱沒することなきを無沒識とし、諸法の根本たるを以て本識とし、種子の宅舍の如きを以て宅識となし、執藏の故に藏識となし、種子識なるを以て種識とし、如來地に在りて無垢識とし、阿陀那識を執持識とし、事識を緣するを緣識となし、五根四大等を顯はすを以て顯識となし、諸法皆梨耶の上に現はるゝが故に現識となし、諸法と所依となつて起るが故に轉識とし、集起の義によりて心識とし、所知依の故に依識とし、異熟識の故に異識とし、分別事識の故に識識とし、大衆部は之れを根本識とし、化地部は窮生死蘊を立つる故に生識とし、上座分別等の諸部は有分識を立つるを以て有識とする。此中、攝大乘論

衆名章中によれる本疏の八名は(5)(7)(2)(17)(4)(12)(14)(18)の順序に排列されたものである。唯識宗の解釋で本疏文に對照すると興味がある。唯識『同學鈔』三の三には以上の諸名に出據を記してゐないが其他に對しては(1)(3)(9)(11)(15)には無相論を引き(8)に辨中邊論を引き(10)に楞伽經を引いてゐる。而して疏文に引ける『楞伽』の三名も『馬鳴論』の三名も此等十八名中に配屬を定むることが容易である。唯だ所說が阿梨耶は染淨同依卽ち眞妄和合の義を述べたものである。唯識家では例へば同學鈔の如き舊人十七名として一阿梨耶（無沒）二阿陀那三窮生死陰四了別識五質多六意識七第一識八第八識九種子識十緣識十一根本識十二有分識十三果報識十四智相識十五眞相識十六藏十七現識（終りの四名楞伽の說）を阿賴耶の舊名としてゐるが此十七名の大部分が本疏文に表はれてゐて然かも眞妄和合の意味で解釋されてゐるのは玄奘の法相宗の影響を受けて居らぬものである。此點は阿梨耶を地論は唯眞、唯識は唯妄、攝論は眞妄和合とする三個の論點に資すべき材料となるものである。抑も攝論宗も地論宗も前者は唯識宗に後者が華嚴宗に併合せらるゝと共に其典藉も堙滅したものが極めて多く攝論宗が果して眞妄和合論であつたか又如何なる眞妄和合論であつたかを攝論宗の人により主張された遺文の少ない場合に今僅に斷片の一部によりて立論するは大膽に過ぎる觀なきに非るも本疏が、教義上に如何に大切のものかゞ推せらるゝのである。

更に疏文に第二阿陀那を解して「此名執識以能執本識爲神我故執彼名識爲我所名爲執識」といつてるが本識を執して神我とするといふのは我を神我としてゐるので眞諦譯金七十論は有目闕譯で今知るを得ないが北魏菩提流支譯天親の『唯識論』（大乘楞伽經唯識論）などに既に出てゐるし（來九の八〇）當時往々此語を使用したものである。

次に阿陀那に七名ありとして『馬鳴論』を引用し

てゐるが其妄識、无明識、業識、轉識、現識、智識、相續識としてゐるのは起信論の三細（根本無明の相狀を分別して業轉現の三細とす）六麤（枝末無明を前の三細に對して智、相續、執取、計名字、起業、業繫苦の六麤とす）と對照すると、三細全部と六麤中の初二とを取りて其根本たる妄識と无明識とを加へたことになる。前の識生滅門、識眞如門なる一識二門及び此阿陀那の七名を立てる依據となつた馬鳴論は何であつたかに就いては起信論釋摩訶衍論の所說更に弘く大乘分識說に關係するものあれば何れ別に之を論ずることにする。更に彼の北魏の菩提流支が第一譯をなし眞諦が第二譯をした天親造『唯識論』は玄奘以前に於ての唯識を說く主要材料であつたらしい。以上はスタイン寫本第七十七函第六包の三の寫本中の一部に過ぎない。今手許に寫本の全部を有たないから最後の斷定を避くるが此攝論疏創製の年代は六朝末から初唐の間であつたものと思ふ。又敎義の方面では攝論家の所說を保存するものとして珍重すべきものと思ふ。其他僅に片鱗には過ぎないが我を神我と呼ぶ如き馬鳴論なる書名の如き阿陀那七名の如き用語や解釋の上に於て珍とすべきものである。

以上は攝論では第一卷依止勝相衆名品の十義勝相の說明を終り阿黎耶阿陀那生起の三識義を十一門を以て說明せんとする中、第一釋名義の一段である。順序としては前後するが前に引いた疏文の前に來る本論第一依止勝相衆名品の十義勝相を明かす一段に於て第五大小乘分別の項下の文を引けば左の如くである。

第五大小乘分別者有其三義一就位弁宗二就行弁義三明大小差別初言就位弁宗者此十勝相位判在大宗顯大法故无等聖敎章偈云十義餘處无見此菩提因此名小乘以爲餘處以此文證明知宗意爲顯大法第二就行弁義者義通大小此云何知第二勝相分

別章中弁三無性偈云由自體非有自體不住故釋解云此三世无性亦通大小此是三無性中無性々義通於大小三无性者是泯相門其理淵深三性立相其義則淺深義尙通大小二乘況彼三性理淺何爲不通以彼三性通於大小類餘九種亦通大小其義無傷第三明大小乘差別者小乘就六識以弁依正及因果道理大乘就本識等以弁依正及因果道理小乘但就六識門中弁染淨有无三性道理大乘通就三識以弁三性差別小乘就彼六識明唯識觀義故彼雜心定品之中就四无色地明緣識捨空等爲唯識觀義大乘就三識及眞識門以明唯識觀義小乘就聲聞六度人无我觀以弁因果大乘就菩薩六度以弁因果小乘就小乘十地以明脩差大乘就菩薩十地以弁脩差小乘就聲聞三種弐門以弁弐學一別解脫弐二者定共弐三者道共就此三種明或學差別亦可就彼道共弐門以明弐學差別大乘就彼三聚弐門明其弐學一名律儀弐謂十善業道二名攝善法弐要脩六度三名攝衆生戒要行四攝小乘就彼八禪地定以弁心學謂四禪四空等如定品廣說成實論家就九禪定門以弁定學如禪品廣說大乘就彼四定以弁定學一大乘光二集福德王三名賢護四名首楞伽摩如心學相中廣說小乘就人无我惠以弁十智用爲惠學如智品廣說大乘就人法二無我智以弁三智用爲惠學如惠學相中廣說小乘就煩惱鄣无數滅无爲以弁滅果如寂采相廣說小乘就三鄣无處數滅無爲以弁滅果如賢聖品說大乘就人无我門盡智無生智中以明智果大乘就三無性眞如智門云云

以上の中无等聖教章偈といふは釋論（眞諦譯）來九の四七左第三行の偈にして辨三無性偈といふのは來九の五四右第五行の偈に當る。第三明大小乘差別の下、記すべきもの鮮からざる中、小乘は六識に就いて唯識觀を明すが「大乘就三識及眞識門以明唯識觀義」といへる一段は三識は阿梨耶阿陀那生起の三識なるが故に此他に眞識を說くを以て大乘となして

ゐる。恐らく此三識以外の眞識門といふは楞伽か起信などの說より出でしものと思ふ。楞伽には眞相識を說いて染法虛妄と同ぜざる識を說いてゐるし眞、現、事の三識を說いてゐるし成唯識論にも如來無垢識契經說を遮してゐる位で印度に「無垢識卽眞如之計」があつたかなかつたかは後代唯識家の人々が「西天全無無垢識卽眞如義眞諦等唐土古師混亂事理以有爲第八之名關眞理也。西天全無如此僻執然論主(成唯識論主)無垢識名言通眞如故預遮相濫」(同學鈔三、全書一の四五〇)などといつてるが本攝論疏は三識以外に眞識を說いてゐて明に攝論宗の立脚地を示してゐる。其他內容全部に涉る解說は別稿に讓るを便とするから玆には略する。

二

攝大乘疏卷第五(80 VII 27)(『解說目錄』注疏部第三十八、『宗敎研究』第八號一五六)

首部闕損せるも尙長篇を存し拇指と中指とにて約一握の卷物で紙質は薄く古色を帶びてゐて兩面共に同一筆蹟の攝論疏である。奧題に

攝大乘疏卷第五

とあり文中「論本云」といへるは攝大乘論にして「釋論曰」といつてるのは其釋論である。現存斷片の初部から見ると勿論眞諦譯の攝論本釋の文である。眞諦譯本論釋論の會本は全部十五卷で往八の百十六紙一冊全部を占めてゐる。そうして此論疏第五卷は十五卷中の第七卷初部から始まつたものらしい。左に其初部の十九行を引用する。二字下げにして六號で擧げたのは本疏の本典眞諦譯本釋の文である。

事善知識卽是生行解力　〔論本〕云已入決定信〔樂〕
正思惟力亦名加行力由無量宿世所習因力故得承事諸
佛爲修道
緣申値佛聞法生正思惟起決定信樂々得此所信之法精
進勤修卽

是加行信樂住乃通今取正成處在十廻所信樂即三種佛性義如前釋

攝大乘論卷七

釋應知入勝相第三之一

悟入入章第二(往八の四七左)

論曰何人能入應知相　釋曰此問修何觀行人、能入唯識觀人、是菩薩觀行有四種力、菩薩者何相、善得福德智慧二種資糧此資糧以何次第修令得圓滿有四種力、一因力二善知識力三正惟力四依止力

論曰大乘多聞熏習相續　釋曰爲離小乘多聞故云大乘、顯非一生於無窮生處、數習多聞熏習心相續、是名因力

論曰已得汎事無量出世諸佛　釋曰過數量諸如來出現於世、是人依佛聽受正教、如教正修行故名承事先已得如此承事故名善知識力

論曰已入決定信樂正位

釋論曰非惡知識等所轉壞者二乘是惡知識所不壞菩薩信樂心已成心不可轉動等卽天魔外道種々方便不能合大乘心轉

釋曰若人於大乘中信樂、非惡知識等所能轉壞故名決定、信有三種一信有二信可得三信有無窮功德、若已有信求修行得因故名爲樂、從十信至十回向是信樂正位、今所明位但取十回向決定信樂名思惟力、大乘多聞熏習爲此力因

論本云由善成熟脩習增長善根是故善得福德知慧二種資糧者

此第四依止力由脩加行力故得成熟福慧資粮圓足得入初地即是初

地依止亦攝持由資粮能持成初地若燈初地即是唯識觀成得入向言

善成熟脩習增長善根者善脩五義一元分別能行所行及所爲行二

元着脩謂不着因々報々恩等三不觀脩謂不觀有因果及能行所行乃

至因果等之相也四者元可璣嫌脩謂攝理又曰无微細過失又能可他心稱

機得益也　五廻向脩恚用衆行施衆生復爲四生廻向无上菩提窮實際

廻施衆生果具此義故名善脩也成熟脩有四義一長時修二无間修三恭敬脩四无

餘修研合增進名脩習也論本云是故善得福德慧智二種

資糧

者若約六度論之施戒忍定爲福德般若爲智慧精進通二種隨所功德則屬功德門慧則屬慧福也

論曰由善成熟修習增上善根是故善得福德智慧二種資糧　釋曰若人已一向決定信樂爲得所樂法慇懃恭敬修觀行法若修觀行法增長功德善根如此由思惟力是善成熟福德智慧資糧次第成熟用此福德智慧作依止得入初地故名依止力此四種力顯能入人

論本云諸菩薩脩於何家入唯識觀者下第三明入界章正明觀智之境後釋可見此間有二意一問釋論曰此境二問位答中此章答境問第四章方答示位也

入境界章第三

論曰諸菩薩於何處入唯識觀　釋曰此問有二意一問何處是唯識境界二問何處是唯識位

以上で攝論十勝相中、第三の應知入勝相に又十章ある中で僅に能入人章第二の全文（縮刷にて十二行）と入境界章第三の初一行との疏文に當る。即ち以上全體で縮刷藏經の半枚足らずの本釋を疏通せんとしたものである。本論だけにていへば僅に三行を解したのみだ（來九の五五右）。第五卷の終文が何であつたか手記が失はれた爲めに遺憾ながら首尾を完うして述べかねる。

本疏は眞諦譯本釋に據つたものであることは引文と對照して明瞭であらうと思ふが笈多譯は入應知勝相勝語第三の下、往九の二十三　又玄奘譯では入所知相分第四の下、往七の二十九を見ると直ぐ笈多譯でも玄奘譯でもないことがわかる。勿論玄奘譯無性釋論でもない（往九の七六參照）。

本疏は取意章でなく隨文解釋であつて別出攝論章とは別撰の樣に思はるゝ。今全文に關する手記を失つたから詳細を述ぶることが出來ないが是も攝論家の著述であつたこと丈は明瞭である。序でに入境界章の初文、現攝論本釋の文は「諸菩薩於何處入唯識觀」とあるが斷片疏文では「諸菩薩脩於何家入唯識觀」となつてゐる。本論（來九の五五）を見ても本釋の會本と同じである。處を家とした方が何やら舊

譯の趣がある。笈多も玄奘も處字を用ゐて家字を用ゐなかつた。

三

攝論章卷第一（『解說目錄』第二注疏部の四〇『宗教研究』第八號一五六）

本寫本は全部行草にて寫され首部闕損の斷片にて首題を逸せるが、後記に

仁壽元年八月廿八日瓜州崇敬寺沙彌善藏在京辯才寺寫攝論疏流通末代　比字校竟

とあり、又後題に

攝論章卷第一

とあり、又別に本寫本に附せられ、然かも紙質を異にせる箇所に

攝論章卷第一

三藏義十番分別論

仁壽元年八月二十八日瓜州崇敬寺沙〔以下破爛〕

とあり、是恐らく後人が前記の後記後題と現存斷片の一部を取りて斯く標記せしものであらう。須らく原題を取りて攝論章卷第一と稱すべきである。三藏義十番分別などいふは僅に一部の題號に過ぎない。但し沙彌善藏の後記に「寫攝論疏」というて攝論章といはざるに見れば攝論章を指して疏と呼んだか或は疏があつてそれに章が附屬してゐたかは判明せぬ。由來疏を作つた外に別に章を書いた人は前述　法常（四の世親釋論疏十六卷と五の略章と參照）慧景（六の攝論疏□卷と七の攝論章三卷とを參照）靈潤（三十八の攝大乘論義疏十三卷と三十九の攝大乘論玄章三卷とを參照）の如く少くとも三人はあつたし現諸目錄中に作者不明の攝論章が三卷と五卷（二十四と二十五とを參照）との二部あるから章疏の中の章とも見らるゝ。特に本文中、即ち第四總分別三寶十二門中第十二辨教意の下に

此元末後兩番各欲分別如疏中所說

というてるから此章の外に疏があつたとも見える。

少くとも著者が同一人であつたか無かつたは別として此攝論章が疏と呼んだものが在つたと想像し得る。

現存斷片中に存せる章文或は疏文の首部は下の如し。

第二（欠損）就三種定躰一名字二別體三一體

第三別解三種三寶者先解名字次數別體後辨一體

就名字內分別有三義一明名及相第二時節義第三

去□機第四總分別三寶者且作十二門分別一辨次

第二制立所以三對□辨同異四福田益物五明相多

少六常無常七盛衰分別八壞不壞九通別分別十約

五眼爲境差別十一明諸所□所敬廣略第十二辨敬

意

更に章文中に存する主題のみを列記すれば左の如し。

二彰義　八門分別　一名二體三明差別四依心通

局五迷執理事分別六起治斷除先後七就位明分齊

八攝邪分別

不住道義　六番分別　一名二分別體□□不住義

三對邪分別四所注境分別五所益分別六位地分別

三藏義　作十番分別　一名二體性三起說因緣四

辨差別五詮旨分別六明對治諸彰七明次第八廣略

分別九大小有無分別十相攝分別第一名者分別有

三一數名二得名三辨名差別云云

篇聚義　作四門分別　一名二體性三約我別體四

總分別

是等の各目に細釋を施せるもの本攝論章である。

此中三藏義に關する上記十番分別の次文を擧げん。

一數名者世習相傳苞含蘊積是藏若依攝大乘論云

何名藏由能攝故此攝何法一切應知義三藏等法是

一切所應知故云一切應知義。　二辨得名者藏雖

有三得名有二修多羅從能詮敎立名毗尼阿毗曇從

所詮事受稱所以然者欲顯藏是能詮相初一就敎體

受名欲顯所詮三藏有別故後二顯所詮若也就體卽

爲一藏○若就所詮卽立定藏但寄○○據示　三辨

名差別者　修多羅藏梵名有二一修多羅二修妬路

修多羅者一對偈顯名所名法分齊名直說語言若論義用有五如雜心以五義解修多羅卽是五名修妬路者是天竺語音輕重此處名別有三一名法本如尋敎悟理名敎爲本詮旨相稱曰如二名經如雜心三契經等契當也經者言能詮表事等於經也此元二名此方○言敎名也三名爲經者但彼處以名?以?一名々二法此卽二名々二法如此名縷爲經名經人言敎爲經若彼此一法各有名者以此名飜彼名若法彼有此无卽以義用以飜名如彼覺用名佛此卽名覺也　毗尼藏名有四種一毗尼二毗那耶三波羅提木叉名四尸羅名此有四種三名行體名一名能詮名三名者翻對餘三卽是毗尼者此方名滅○?論義滅有三一果中涅槃滅二因中彌留陀滅○?滅三戒此滅諍名毘尼滅戒體非滅戒能除業是戒之義用故入大乘論云佛敎二乘菩薩淨己三業乃至成佛並及衆生滿足一切尸波羅密乃至當知摩訶衍者隨順?毗尼毗那耶者天竺語音差別解義與毗尼同　波羅提木叉者此名解々脫々有二種一无法解脫二有法解脫相續解脫子注云五分法身名解脫胡音云毗木叉涅槃解脫胡音直云木叉此二解脫是果解脫是戒因所得故遺敎經云戒是解脫之本故名波羅提木叉若依雜心波羅提木叉者云云

（○?は文字ありて不明　△は略體若くは難解の字を表す）

右の文中、一數名の下の攝論文「如何名藏由能攝故」とは眞諦譯釋論無等聖敎章第一、往八の四右第十一行の文である。笈多譯も玄奘譯も文句が違つてゐるから此攝論章は時代の上から玄奘譯でないばかりでなく又笈多譯でもない。二得名は釋論に對照して知るべし。三辨名差別中、修多羅を直說語言とし義用によれば五名修多羅なりとは法救の雜心論（冬十二の七四右）に經に出生（法本）、涌泉、顯示（微發）、繩墨、結鬘の五義ありといふを指せるものか。南傳にても覺音が經に六義ありとするのが稍之に類似してゐる（Sumangalavilasint）。兎も角此五名の

こと法華玄義八にもあり當時通用した樣である。五名修多羅は天竺語言の輕重にて支那に譯して法本、經、契經、綖(縷)の三名とせり。淨影慧遠は大乘義章一に是等諸異名の中、法本と直說と契經との出據を擧げて經本の名は仁王と百論とにより直說語言は成實論により契經は雜心業品增一阿含序によりて時人(隋)が此等の注文に執して名を立てしもので正翻でないと指摘し正翻は綖だとして律文を引いてゐる。綖には分別功德論や四分律が依據となり法本は二王經の外に留支三藏の所傳だとも言ふ。佛地論には能貫能攝の義とし無性の攝論には貫穿縫綴の義となす如く綖とか線とか縷とか譯するを以て正翻とするが古來の傳である。本攝論章は修多羅、修妬羅の舊音譯を用ゐて新譯素呾纜を引用してゐないこと五名修多羅、直說語言、法本、契經、綖の諸譯を淨影天臺の諸遺著に比して殆んど平行の解釋であつて新翻の音義を轉用せし形迹なきを知る。

次に毗尼藏の解釋に入りて四名を擧げ、毗尼、毗那耶は天竺語言差別に過ぎずとして毗尼と波羅提木叉と尸羅とを解釋した。文中難解の箇所あるも大體毗尼毗那耶は滅の義なりとしてゐる。一は涅槃滅、二は彌留陀滅、三は戒の滅譯とし滅の三義を擧げてゐるが彌留陀の彌は爾かもしれない。果の Nirvana に對して因を Nirodha としたのかも知れない。滅譯は附釋である。

全體毗奈耶は調伏の義で普通に律と譯してゐるが古い所では羅什は善治とし(注維摩一)秦譯四阿含暮抄上には律或は志眞とし種々の譯語あるも玄應は離行、滅、化度、調伏(音義十五)道宣は律、滅とし就中律を正翻とし(行事鈔中上)法礪は「毘尼正音此方稱滅」として更に毗尼に多義を擧げてゐるし(四分律疏一末)法藏は調伏と滅とを擧げてゐる(探玄記一)から唐代の作疏家は滅を以て毗奈耶を解してゐるから本攝論章が唯だ滅をのみ譯して是に三義を

附したのは唐以前の疏家として素朴の釋風と共にそろ〳〵訓詁附會の風に入らんとする痕迹を示してゐる。

波羅提木叉の解釋に於ても解々脱々と名くといつてるのは、別解脱の意味でそういうてる樣に思はれる。抑も波羅提木叉 Pratimoksaは物でいふと七衆所受の戒則をいひ、又從つて布薩に於て讀誦せらるゝ戒本の義であるが、此語義に關しては種々の意義に解せられてゐる。此處には近時南方傳によるチルダース等諸家の解義を略して支那の古解を採る。普通に解脱、別解脱、處々解脱などといふが、別解脱とは七衆所受の戒律は別々に身口七支の惡を解脱するから、定共戒道共戒と異るを示す爲めとせらる。雜藏經には解脱生死といひ、淨名疏には保得解脱といひ、遺敎經には戒は正順解脱の本といふ。正順解脱は隨順解脱と同義で、戒律は解脱の結果に隨順する所から斯くも名けらる。波羅提木叉を唐道宣は處々解說となし（『行事鈔』一）、隋慧遠は解脱とし（『大乘義章』一）、法藏は別解脱とし別に就きて二義を擧げてゐる（『探玄記』三）。隋唐代表家の釋語でも解脱、處々解脱、別解脱であつて、解々脱々といふのは珍らしい。此解々脱々に二ありて、其子注に「五分法身名解脱胡音云毗木叉涅槃解脱胡音直云木叉此二解脱是果解脱」というてゐる。子注といふのは北魏の義記類から隋唐頃の章疏に多く使用せられた科段の分目であつて、毗木叉 Vimoksa と木叉 Moksa とを解脱と涅槃解脱とに配してゐる。波羅提木叉は波羅提毘木叉 Prativimoksa とすることあり、木叉も毘木叉も共に解脱の義であるが、之を二つに見たものである。此果より見て解脱之本となる所から遺敎經を引いたものである。

就中此處に胡音というてゐるのは珍らしい。本疏でも音譯の異りを云ふ場合には「毘尼毘那耶者天竺語音差別」とか「五名修妬羅者是天竺語音輕重」な

どゝいつてゐて、玄應音義十五に毘尼毘那耶等、「皆由梵音輕重聲之訛傳也」といふのと同口吻である。西音とか天竺とか梵とか彼土とかいふ普通の綱格を破りて舊慣其儘で「胡音云」といつてるのは、此章の隋若しくは其の以前の出なるを思はしむるもので、吉加祥大師が胡吉藏といつた時代を聯想せしむるものである。此等新出三疏に關する詳細なる內容の解說及批評は前にもいうた通り別稿に讓りて、玆には四十餘部の攝論疏が既に散逸して傳つてゐないのに、新に敦煌の土中から三つも異つた攝論疏が出たことを紹介するに止めて置く。